

## 学校訪問 宮城県仙台第三高等学校

所在地 仙台市宮城野区鶴ヶ谷 1 丁目 19 番地  
訪問者 5 名  
訪問日 平成 29 年 6 月 29 日・30 日  
対応者 校長・教頭（2 人）・主幹教諭



### ① 学校概要

昭和 38 年に開校し、平成 25 年に創立 50 周年を迎えた新しい学校である。創立当初から男子校であったが、平成 21 年から男女共学になった。平成 22 年に 5 年間の SSH の指定を受け、本年度第 2 期目の SSH の指定（5 年間）を受ける。もともと男子校ということもあり、現在でも生徒総数 960 名中、男子が 670 名、女子が 290 名と圧倒的に男子が多い。制服は私服である。部活動も盛んで、文科系 15、体育系 17 と多い。特に弓道とフェンシングが強く、全国優勝したこともある。

### ② 宮城県仙台第三高等学校の「協同的な学び」「アクティブ・ラーニング」

#### ア 導入の経緯

校長先生より「仙台三高ならではの新たな研究システム構築の理念」が提示され、生徒の多様化に対応するためプロジェクトを立ち上げた。平成 23 年に宮城教育大学と提携を結ぶことにより外部連携を始め、平成 27 年には「S-J 研究センター」という SSH とアクティブ・ラーニングを推進する分掌を設置した。

#### イ AL の定義

生徒の実情を把握し、「育成したい力」からの逆向きの発想からスタートしている。

《育成したい力》

- ・思考力、推理力の育成
- ・コミュニケーション力の育成
- ・問題を解決しようとする心の育成
- ・応用力の育成
- ・発表力、表現力の育成
- ・仲間（共同）意識の高揚

★仙台高校の授業における三観点：「知的好奇心」「考える」「生徒主体」➡AL

#### ウ 導入後の変化

- ・教員研修のとらえ方が変化した。
- ・以前は授業を公開することへの抵抗感が教員内であったが、現在はいつでもだれでも授業を参観できる雰囲気である。
- ・ペア活動、グループ活動等の能動的アウトプット型を実践している先生は全体の 88%、対話や発問等の双方向型を実践している先生が全体の 77% になった。



### ③ 授業見学

《英語》

#### ○英語表現

- ・生徒には、あらかじめ練習問題を解くための「**ヒント集**」が配付されており、生徒はそれを参考に問題を解いてくる。
- ・各自解いてきた練習問題をグループで確認し合い、分からない部分はお互いに教え合う。どうしてもグループで納得できない箇所は先生に質問する。教師がいちいち1問ずつ生徒に質問し、当てられた生徒がそれに答えていくという英語表現にはありがちな授業スタイルではない。
- ・最後の英作文は、なるべく別解を考えさせる。
- ・評価のつけ方があらかじめはっきり生徒に示されている。(ルーブリックを用いたパフォーマンス評価も取り入れている)

#### ○コミュニケーション英語Ⅱ

- ・生徒に毎回A4サイズの宿題プリントが出され、次の時間までの宿題となる。(今回はプリント最後の英作文を完成させる)  
→**生徒には必ず予習・復習を何らかの形で強いている。**
- ・英語という教科を通して、生徒に「**思考と判断**」をさせている。単に、英文で書かれている内容を日本語に訳して終わり(それで分かったつもりが多い)ではなく、そこから一歩突っ込んで、「自分だったらどう思うか、どうするか」等を考えさせることにより、「**より深い読み**」を体験させている。

《家庭科》

#### ○家庭基礎 (普通科)

- ・5人1グループで4台のミシン、1台のタブレット iPad が用意されていた。
- ・iPad には、あらかじめ、先生の師範作業の様子が録画してあるため、生徒は、自分の進度に合わせて工程ごとに iPad を見て実習を進めることができ、なかなか生徒に作業手順を伝えにくい被服実習をスムーズに進めることができていた。

## ○家庭基礎（理数科）

- ・ 燃焼の様子を後で確認できるように録画しながら実験が進んだ。
- ・ 実験をする上での注意点を徹底させていた。事故ややけどが起きないように細かな指示をしていた。
- ・ 宮城教育大学が開発した『miyagiTouch』を利用。大型ディスプレイとスマホを結び、電子黒板で利用できるアプリが使用できるようになっており、実習の様子を説明したり、生徒のホームプロジェクト発表などで活用している。

## 《数学》

- ・ 「数研通信」を参考に、順列、組み合わせで P や C の混同した式から問題文を作成するグループ学習。
- ・ まずは、各自で考えて、6人で意見を交流させる。その後、確かにその問題が与えられた式になるか確かめるために検証役を決める。
- ・ 最終的にグループ代表のワークシートに書き込み、グループ単位で発表して解決法を共有する。

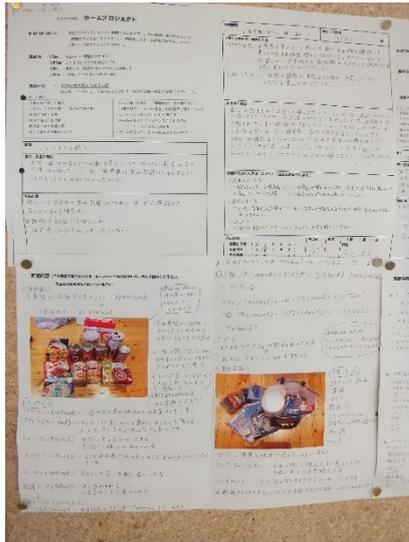
## 《地歴》

### ○世界史 B（文系クラス）

- ・ 選択教室で行われた。少人数ということもあって、生徒はプロジェクターを中心に放射状に着席していた。
- ・ 教員が複数の生徒に意見を求めると、生徒は既習事項をもとに自分の考えを文章化して答えていた。
- ・ 授業は基本的に ICT(パワーポイント)を用いて行い、補足事項に板書を用いていた。
- ・ 授業は授業プリントの空欄部分を、スライドを参照しながら埋めていく形で進んでいく。プリントは単なる事項の羅列ではなく、歴史的事実のつながりを視覚的に理解できる構造になっている。
- ・ 新出事項は教員による講義が多いが、小さな発問を繰り返すことで双方向の授業を成立させている。

### ○地理 B（2年理系クラス）

- ・ 授業は、写真を用いることで、実際の地形をイメージさせながら教員による解説をしていく。
- ・ 生徒には学習内容のアウトライン以外はすべて白紙のプリントが配付されており、教員の説明やスライドに書かれた内容をメモしているようであった。全体的に書いている内容は多い。
- ・ 生徒にとって比較的身近な地域の例を出すなど生徒への問いかけを重視していた。
- ・ 「課題解決型」アクティブ・ラーニングを進めている。しかし、世界史という教科の性質上、未知の課題を解決するという形ではなく、これまでの歴史事項に関連した知識を利用して自分なりの考えを生み出し、他者の意見を参考にしてより考えを洗練させていくことを目指している。



#### ④ 最後に

2日間に渡る学校訪問であったが、校長先生をはじめ、2人の教頭先生、そして主幹教諭の先生には大変お世話になった。私たちが生徒の授業の様子を参観している最中でも校長先生自らビデオ持って足繁く教室を回っていらっしゃる姿が印象的だった。校務分掌の中では「S-J研究センター」が目にとまった。SSHとALを中心にしっかりと校内で体制を整え、研究している姿は大変参考になった。その主任である主幹教諭の先生が語っていたように、仙台第三高校でもALのスタート時点では紆余曲折があり、若手の教員を中心に粘り強く説得を続けながら、AL主体の授業に賛同してもらおう教員を増やすのにかなりの苦勞と時間を要したということである。今では本校も若手の教員を中心に、AL型授業の展開に抵抗がなくなっているが、今後はさらにその輪を広げ、ALを通して授業改善に取り組んでいこうと思う。

仙台第三高校は、評価に関しても、すでに英語科でルーブリックを作成し、それに基づいてパフォーマンス評価をしているなど、最先端の取組を行っている。本校も研究指定2年目ということでそれなりに先を進んでいるように感じていたが、まだまだであると実感した。

このように、今回の学校訪問は改めて現在の本校の取組を見直すとともに、今後の研究に向けてとても示唆に富んだ実りの多い訪問であった。